

The Edgar Allan Poe Society of Japan

NEWSLETTER No.13

<http://www.poejapan.org/>

September 1, 2016 (第9回大会資料号)

翻案というジャンル

日本ポー学会会長 巽 孝之
(慶應義塾大学文学部特任)

ポー文学新訳が相次ぐ昨今、北米の学会では、いま翻訳ならぬ翻案研究が盛んだ。昨年冬の国際ポー会議でも、adaptation に限ったセッションが設けられていた。そもそもポーという作家自身が詩や小説、戯曲に批評などさまざまな文学形式に通じていたうえに、その卓越した編集者のセンスを生かした翻案的作品を少なからずもたらした結果、文豪の地位を獲得するに至っている。創作から翻案が生まれるというよりは、そもそもの翻案が創作と信じられて来たのではあるまいか。

わたしはもともと翻案に目がない。これまでも折こふれてご紹介してきたように、ポー生誕 200 周年の年 2009 年には、有名作家によるおびただしいポー作品翻案が書かれ、それらを取めた多くのオリジナル・アンソロジーが競合し、解説を寄稿する機会もあった。その影響は映画や音楽にも表れている。一番の変わり種はセス・グレアム＝スミスの 2010 年の小説でハリウッド映画にもなった『ヴァンパイアハンター・リンカーン』だろうか。南北戦争勃発の真相をアメリカ合衆国における吸血鬼増大に求め、この一大勢力と戦う大統領を描く驚天動地の物語なのだが、本書のリンカーンは南部にて、この異常事態のカギを握る作家ポーと邂逅する。映画版『リンカーン/秘密の書』ではそのくだりは割愛されているけれども、ポーとリンカーンは同い年なのだから、両者の出会いには物語学的必然性がある。グレアム＝スミスの前作でジェイン・オースティンの英文学史上の名作に挑んだ『高慢と偏見とゾンビ』も最近映画化されて、この手の翻案スタイル「マッシュアップ」はたちまちブームを巻き起こした。

そんなことを考えていた矢先、この 8 月にミズーリ州カンザスシティの会議で、プロ作家数名が興した出版社ライター・パンク社の新刊に興味深い翻案アンソロジー数冊を発見した。「シェイクスピア文学パンク版」(Shakespeare Goes Punk) というコンセプトのアンソロジーが二巻も出ている上に、何と「ポー文学パンク版」(Edgar Allan Poe Goes Punk) なるコンセプトでも一巻が出たばかりだ (*Merely This and Nothing More*)。パンク・ロックを代表する音楽家ルー・リードにはずばり『ザ・レイヴン』なるオマージュ・アルバムがあるが、果たしてパンク作家たちが競作した本書には時計仕掛けの大鴉やナテク・ロボットが再生するアッシャー家など、秀逸なアイデアが詰まっている。翻案作家の想像力はとどまるどころを知らない。

第9回年次大会・第10回総会プログラム

◎第9回年次大会・第10回総会のご案内

日時 2016年9月10日(土)

会場 城西国際大学 東京紀尾井町キャンパス1号棟 地下ホール
東京都千代田区紀尾井町3-26

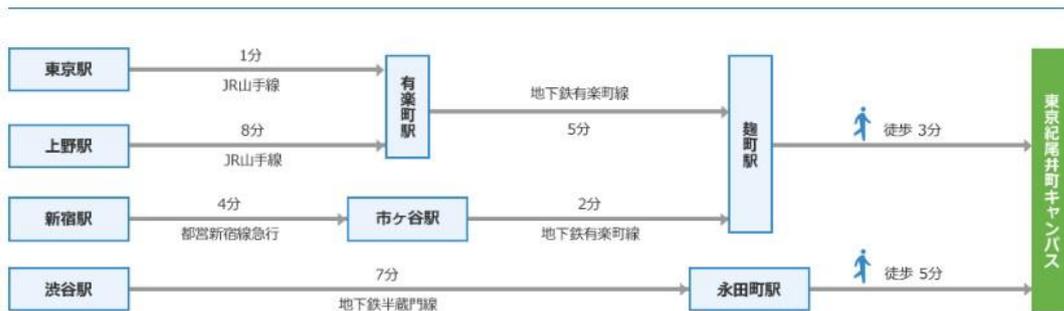
交通アクセス—東京メトロ有楽町線 麹町駅 1番出口より徒歩3分

東京メトロ南北線・半蔵門線 永田町駅 9番出口より徒歩5分

東京メトロ丸の内線・銀座線 赤坂見附駅 D出口より徒歩8分

JR中央線・総武線 四ツ谷駅 より徒歩10分

(城西大学 案内・交通アクセスページ=<<http://www.josaiac.jp/about/access/koicho.html>> より)



東京紀尾井町キャンパスの周辺図



[東京紀尾井町キャンパスの周辺詳細図]



↑会場の1号棟をリス透視に入っています。

9:00~10:10 役員会 (4階 中会議室)

10:00 受付開始

10:20 開会式

開会の辞 日本ポー学会会長 巽 孝之

会場挨拶 水田 宗子 (学校法人城西大学理事長)

総合司会 須藤 祐二 (法政大学)

10:30 ~11:10 **研究発表 1**

司会 三浦 笙子 (東京海洋大学名誉教授)

彼が私を語る——「鍋山奇譚」と『青白い炎』の言語遊戯

内田 大貴 (慶應義塾大学・院生)

11:10 ~11:50 **研究発表 2**

司会 常山 菜穂子 (慶應義塾大学)

Poe の extravaganza を読む

森本 光 (京都大学・院生)

11:50 ~12:30 **研究発表 3**

司会 西山 智則 (埼玉学園大学)

翻訳で再考察する“Berenice”——*Fahrenheit 451* に引用されオリジナルテキストから削除された一文

宇佐 教子 (日本大学・講師)

13:30~16:00 シンポジウム

異言語間のポー——その翻訳可能性・不可能性を考える

司会・講師 **井上 健** (日本大学)

講師 **鈴木 和彦** (パリ第10大学・博士課程)

講師 **鴻巣 友季子** (翻訳家・文芸評論家)

講師 **寒河江 光徳** (創価大学)

16:20~17:20 **特別講演**

水田 宗子 (城西国際大学)

司会 巽 孝之

ポーと尾崎翠

17:30~18:00 第10回総会

18:00 閉会の辞 日本ポー学会副会長 伊藤 詔子

18:00 ごろ~19:30 ごろ 懇親会

会場 カフェ (地下ホールの向かい)

お知らせとお願い

- * 今回の懇親会は、学内で、茶話会形式でおこないます（アルコールなし、食事と飲み物）。
- * 懇親会会場は同じ地階フロアにあります（徒歩 10 秒）。
- * **当日はこの Newsletter No.13 をお持ちください。**
- * 会員以外の方も来聴歓迎です。お誘いあわせの上ご参加ください。

研究発表概要

1. 彼が私を語る——「鋸山奇譚」と『青白い炎』の言語遊戯

内田 大貴

ポーは非常に多くの作家に少なからぬ影響を与えているが、ロシア人亡命作家ウラジーミル・ナボコフもその一人であり、自作におけるポーへの言及は多い。ナボコフの代表作『青白い炎』では、アパラチア州ニュー・ワイという架空の地名が舞台となるが、そこは、語り手チャールズ・キンボートによれば、「パレルモと同じ緯度にある」（おおよそ北緯 38 度）という。そして、この緯度上にはポーの短編小説「鋸山奇譚」の舞台となる、ヴァージニア州シャーロットズヴィルがあり、ナボコフが意識的にこの地を舞台に設定した可能性は否定できない。

この二つの作品に共通するのはこれだけではない。アナグラムによる神秘的な体験の種明かしがあるものの、両作品にはともにその偶然性とパラノイア性において否定しきれない部分がある。つまり、ベドローとオルデブとのつながりをミスプリントによるアナグラムに見出してしまう「鋸山奇譚」の語り手と、詩人ジョン・シェイドの 999 行からなる詩「青白い炎」を歪曲しつつ、そこに自身とのつながりを見出してしまうキンボートこと大学教授ボトキンとのあいだに類似点が見出せるのである。このような言葉遊びに着目しつつ、ポーとナボコフの作品における、死と死後の生のテーマも踏まえて論じたい。

2. Poe の extravaganza を読む

森本 光

ポーの作品の中には、“extravaganza” という副題が付けられた短編小説が二つある。その二つとは、“The Devil in the Belfry” と “The Angel of the Odd” である。また、“Never Bet the Devil Your Head” は、副題として付けられてはいないものの、ポー自身が友人の Joseph E. Snodgrass への手紙の中でこの短編を “a mere Extravaganza” と呼んでいる。さらに、編集者 Mabbott が “extravaganza” の形式で書かれていると述べた “The Bargain Lost”、およびそれに修正を加えた “Bon-Bon” が同じジャンルに属すると考えられるだろう。extravaganza とは、一般に音楽劇や文学のある種の特徴を表わす用語であるが、19 世紀前半のアメリカでは黒塗りをした喜劇役者による滑稽な寸劇を指してこの言葉が使用されていた。こうした背景を踏まえて上記の extravaganza の作品群を読み直すと、そこに共通する作者の意識があらわれていることがわかる。この発表では作品の細部に焦点を当てつつ、このジャンルについての理解を深めることを目的とする。

3. 翻訳で再考察する “Berenice”

——*Fahrenheit 451* に引用されオリジナルテキストから削除された一文

宇佐 教子

1835 年初出の「ベレニス」（「ベレナイシィ」）第一段落には “I have a tale to tell in its own essence rife with

horror—I would suppress it were it not a record more of feelings than of facts.” という一文が存在した。英米語圏では1845年以来この部分は削除された。観念としてのベレニスを保存するために、物質としての歯を所有する Egæus の狂気は、ポーが与えた「事実より感情の記録としての恐怖を語る」という一節と齟齬を生む程に、物語の原動力となり、ポーはこの一節を削除する。そして1966年、この一節は映画『華氏451』のラストシーンに引用されて再び注目を集める。本が禁じられた世界で、焚書官であった主人公が、一転、暗唱することで物語を守る“Book People”として生きる際に、彼に選ばれたのが「ベレニス」だ。Truffautは、Baudelaireにより仏語訳された“Bérénice”を更に英語訳したのは、仏語版「ベレニス」にはこの一節が含まれているが、英語版には含まれていないからだと述べている。ポーにより削除されトリュフォーの映画で蘇ったこの一節こそが、観念を記録する媒体として人間存在に優るものはないがゆえに人は事実よりも感情の物語を語り続けねばならないという、『華氏451』と「ベレニス」に通底するテーマを分析する重要な鍵であることを証明していく。

シンポジウム 全体趣旨・個別趣旨

異言語間のポー——その翻訳可能性・不可能性を考える

ボードレールの訳筆を通して世界文学空間に蘇生したポーが、その後も世界中で訳し継がれて、今日なお、もっとも多く他言語に翻訳されるアメリカ文学者であり続けていることは今更指摘するまでもない。翻訳という操作を経て繰り返し再生産されていくポー文学の有り様については、2年前に刊行された、Emron Esplin, Margarida Vale De Gato 編の論文集 *Translated Poe* (2014) においても、すでに縦横に論じられている。

本シンポジウムにおいて、「翻訳されたポー」あるいは「異言語間のポー」に考察を加えるにあたって、あらためて参照軸の一つに据えてみたいのは、解釈学的翻訳論の古典、ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」(“Die Aufgabe des Übersetzers,” [1923]) である。ベンヤミンはまず翻訳という営為を、意味を複製し、伝達する機能から切り離す。その上で、言語相対論的立場を転倒させ、諸言語が補完し合うことによって、言語間の奥深い関係(「純粹言語」)が照らし出される道程を遠望して、「忠実」と「自由」という、翻訳方法における伝統的二項対立の乗り越えを企図した。ベンヤミンはまた、偉大な芸術作品の歴史には、源泉・影響、成立・形成という二段階に加えて、翻訳を介した「死後の生(Überleben)」あるいは「生の持続(Fortleben)」という、次なるもう一つの段階があるとして、異言語において原作が新たな表現を獲得して徐々に「後熟」していく遠大な歴史を夢想した。かくして、作品の「死後の生」に関わる翻訳者は、創作者とは異なる独自の使命を有する存在となる。

本シンポジウムは、こうしたポー文学の「生の持続」をいくつかの言語に即してたどり、その「後熟」の諸相に、さらに、ポーの原文が内包する翻訳可能性と翻訳不可能性の本性に光を当てんとするものである。もちろん、翻訳の読者・受容者の存在というものは最初から視野の外に置いてしまうベンヤミンの所論に対して、目標言語(target language)に焦点を定めた翻訳(不)可能性の議論を対置することは十分に可能であろう。目標言語ベースの翻訳(不)可能性論においては、必然的に、読者反動的、言語学的、語用論的、あるいは比較文学的レベルの評価基準が重視されることになり、そのことは、ベンヤミン理論にいかにもうまく合致しようとも、下手な翻訳は依然として下手であるという冷徹な事実を浮かび上がらせ

てもくれるだろう。

本シンポジウムにおいては、鈴木氏にはフランス語を、寒河江氏にはロシア語を、先頃ポーの新訳を上梓された鴻巣氏には日本語を目標言語として設定して、異言語内における、あるいは異言語間における、ポーの持続する生命について、自由に、存分に語り合って頂くこととする。(文責 井上健)

「モルグ街の殺人」と重訳・再翻訳の問題

井上 健

明治・大正期日本における「モルグ街の殺人」翻訳の歴史は、まずは翻案、擬似翻訳(pseudotranslation)、訳注、重訳など、翻訳という営みの周辺領域をめぐって展開されていった。日本近代文学史に少なからぬインパクトを与えたはずの森鷗外訳「病院横丁の殺人犯」(『新小説』、大正2年、1913)も、独訳のポー全集(J.C.C. Bruns' Verlag, 1904)からの重訳である。本報告においては、主にポリシステム論、重訳・再翻訳の視点から、近代日本においてポー翻訳が果たしたジャンル生成機能について再考してみたい。

(散文)詩の創成——ポーを翻訳できないボードレール

鈴木 和彦

ドイツ人が聖書をルター訳で読むように、フランス人はポーをボードレール訳で読む。フランス近代詩の父として名高いシャルル・ボードレール(1821-1867)だが、この詩人を語る上では、フランスにポーを初めて本格的に紹介した翻訳者としての功績も無視することはできない。事実、詩集『悪の華』(1857)が後世の詩人たちに決定的な影響を与え続けているように、ポーの思想もまたマラルメ、ヴァレリーといった詩人たちに脈々と受け継がれていったが、彼ら自身が証言する通り、フランスの読者にとってポー体験はボードレール体験と不可分なものとしてある。

本報告ではフランスにおけるポーの受容史を簡潔に辿りつつ、「翻訳可能性・不可能性」というシンポジウムの主題を、ボードレールによるポーの翻訳に照らして検討する。とりわけ詩篇「大鴉」の仏訳を事例として、詩作品の翻訳に伴う「翻訳不可能性」が、ボードレール自身の詩作活動において韻文から散文へ舵を取るひとつの契機となり得たのではないかという仮説を検証する。

翻訳の可不可、^{カフカ}賞味期限、および巧拙と、後熟の関係

鴻巣友季子

文学作品の「死後の生」「生の持続」、それに続くナーハライフエ(後熟)は、とくに古典の新訳に携わる者として、つねに強く意識せざるを得ません。とはいえ、ベンヤミンの言う後熟とは、そのテキストが翻訳可能であることを前提にしています。ドイツ語、フランス語などの西洋言語に比べ、原文の英語から構造、語彙、統語法、発音などにおいて、あまりに遠く離れた日本語で、くねり、うねり、からまったポーのアラバスク文体とそのテキストの翻訳は果たして「可能」なのか。換言すれば、ベンヤミンの言う「大なる言語」という器の「かけら」として、原文にどこまで寄り添うことができるのか。そもそも日本語のような構造の言語はベンヤミンの想定する言語の中に入っていなかったかもしれません。

『E・A・ポー』(ポケットマスターピース09)の編訳作業を通して、fidelity と transparency の狭間で

考えたこと。異言語同士の翻訳可能性・不可能性の問題とともに、作家の *idiosyncrasy* について思い致したことも、現場からの声としてお話しできればと思います。また、井上健氏の趣意書にある「ベンヤミン理論にいかにかうまく合致しようとも、下手な翻訳は依然として下手であるという冷厳な現実」の指摘を受け、忠実性を楯にした「下手な翻訳」についても、恐々考えてみたいと思います。

ラフマニノフの合唱交響曲「鐘」はどのように生まれたのか

——コンスタンチン・バリモントとウラジーミル・ナボコフの翻訳技法の違いについて考察する

寒河江光徳

ポーの作品がいかにかロシア・モダニズムの興隆に息吹を与えたかについてつまびらかにするためには、ロシア象徴派詩人が行なった翻訳の歴史に眼を見張らねばならない。本報告では、ロシア前期象徴派の代表者であったコンスタンチン・バリモントがおこなった翻訳のなかからポーの“The Bells”を取り上げ、そこに用いられた翻訳技法に着目する。さらに、この作品がラフマニノフによって混声四部合唱に翻案された際、ウラジーミル・ナボコフがラフマニノフにバリモントの翻訳に異議を唱え、自らが別の翻訳を提案した事実について論究する。一体、バリモントとナボコフのそれぞれの翻訳技法の違いは何であったのか。紆余曲折を経てポーの作品がいかにかラフマニノフの合唱交響曲に翻案・変奏されたのかについて考察を試みる。

学会誌『ポー研究』投稿規程〔抜粋〕——締め切り11月末——

- (1) 投稿を受け付ける原稿は、本学会の会員による、未発表のものに限ります。口頭発表等をもとにした場合は、その旨を本文末尾に明記してください。原稿の最初のページに、論文の題、著者名、所属、連絡先（メールアドレス）を明記してください。
- (2) 日本語による論文は400字原稿用紙換算で40枚以内、英文の場合は7000語以内。引用、注釈、スペースも、規定の枚数、字数に含まれます。
- (3) A4判用紙を使用し、ワープロにて作成（手書き原稿は受け付けません）。日本語原稿はA4判用紙1枚に横書きで1200字程度、英文はA4判用紙1枚に30行で打ち出してください。フォントは、日本語は明朝体、英語はCenturyを使用。引用、後注、引用文献一覧の体裁は、*MLA Handbook for Writers of Research Papers* (6th edition) に従って作成のこと。
- (4) 日本語論文、英語論文ともに、500語程度（1ページ以内）の英語による要旨を添えてください。
- (5) 論文、要旨ともに、母語以外で書かれたものについては、あらかじめネイティブ・スピーカーのチェックを受けて完全原稿としてください。
- (6) 投稿に際しては、オリジナル原稿に、コピーを3部添えて送ってください（計4部となります）。投稿原稿は原則としてお返しできません。

〔規程の詳細は学会誌『ポー研究』巻末をご覧ください〕

日本ポエー学会 第8回年次大会 の記録

日本ポエー学会 (The Poe Society of Japan)
第7回年次大会・第8回総会プログラム
 日時 2015年9月19日(土)
 会場 成蹊大学 6号館301 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

▼10:00 受付開始
 ▼10:20 開会式
 開会の辞 日本ポエー学会会長 巽 孝之
 会場校挨拶 成蹊大学文学部長 松浦 義弘

▼10:30~11:50 研究発表 司会: 野口 啓子(津田塾大学)・大串 尚代(慶應義塾大学)

1. 物言う眼球——ポエー、トウエインと気球譚の系譜
 細野 香里(慶應義塾大学・院)

2. ポエーと〈オリエント〉
 外山 健二(常盤大学)

▼12:50~15:20 シンポジウム ポエーと精神分析再考
 司会・講師 遠藤 不比人(成蹊大学) ポエー、精神分析、脱構築
 講師 斎藤 環(筑波大学) C・オーギュスト・デュパン、あるいは不在の精神分析
 磯村 大(金杉クリニック・精神科医) 如何に体験を伝えるか
 ——ポエーにおける幻覚、アルコール、そして精神分析以前
 河野 智子(Independent Scholar) 「天邪鬼の精神」と強虐性
 ——“supererogation” という特徴をもつ告白機構の力

▼15:40~16:40 特別講演 『エドガー・アラン・ポエーの復讐』に書きそびれたこと
 村山 淳彦 司会: 巽 孝之(慶應義塾大学)

▼16:50 ~ 17:20 総会
 ▼閉会の辞 日本ポエー学会副会長 伊藤 詔子

▼18:00 ~ 20:30 懇親会 会場 gobelins 会費 6000円(学生3000円)

期日 2015年9月19日(土)

会場 成蹊大学 大学6号館

301教室

東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1

(▽9:30~10:20 役員会)

▽10:20 開会式 ▽10:30~11:50

研究発表〔細野香里、外山健二〕

▽12:50~15:20 シンポジウム「ポ

エーと精神分析再考」〔遠藤不比人+斎藤環+磯村大+河野智子〕

▽15:40~16:40 特別講演「『エドガ

ー・アラン・ポエーの復讐』に書きそびれたこと」〔村山淳彦〕 △16:50

~17:20 総会、閉会式 ▽18:00~

20:00 懇親会



日本ポエー学会第8回大会・第9回総会は、東京吉祥寺の成蹊大学で開催されました。特にラカン協会の協力を得たシンポジウム「ポエーと精神分析再考」には学会員以外の聴衆も多数集まってくださり、充実した大会となりました。懇親会はお近所のイタリア料理屋「ゴブラン」を借り切って楽しい時間を過ごしました。お骨折りいただいた成蹊大学の諸先生(とりわけ遠藤不比人さん)、また学生のお手伝いの皆さん、そして参加して下さった皆様に厚く御礼申し上げます。特別講演とシンポジウムの記録は学会誌『ポエー研究』8号に掲載されています。

会場



開会式



総司会 福島祥一郎氏

巽孝之ポー学会会長の挨拶

松浦義弘文学部長の会場対挨拶

研究発表 1・2



細野香里氏



外山健二氏



司会 野口啓子氏・大串尚代氏

シンポジウム ポーと精神分析再考



司会・講師 遠藤不比人氏



斎藤 環氏



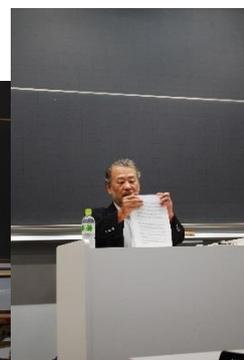
磯村 大氏



河野智子氏



特別講演 村山淳彦 氏 『エドガー・アラン・ポーの復讐』に書きそびれたこと



懇親会その他のスナップ



総会資料

日本ポー学会 2015 年度会計報告 (2015 年 4 月 1 日-2016 年 3 月 31 日)

収入の部		支出の部	
繰越金	672,874	学会誌『ポー研究』作成費	254,880
学会費	233,000	Newsletter 作成費	35,520
広告費	0	大会準備・運営費	108
大会懇親会費	93,000	大会懇親会費	110,000
寄付金	0	講演謝礼金	50,000
学会誌販売	29,800	役員会開催費	0
		人件費	12,000
		郵送・通信費	40,659
		事務用品費	0
		振替手数料	864
計	1,028,674	計	504,031

収入合計	1,028,674
支出合計	504,031
次期への繰り越し	524,643

上記のとおり相違ありません。

監査の結果、上記のとおり相違ないことを証明します。

2016年4月28日

2016年4月28日

2016年5月18日

日本ポー学会会計

日本ポー学会監査

日本ポー学会監査

須藤祐二 ㊞

内田 市五郎 ㊞

水田 宗子 ㊞

.....

編集後記

ニューズレターの刊行が思うようにできず、毎夏忸怩たる思いをしています。この点については、編集部と称しながら実質的に事務局長の作業ですので、責任はもっぱら部長にあります。今後はWebの活用なども含め、少し改善策を練ろうと考えています。

ニューズレターへの投稿をつねに募っています。エッセイのほかに読書感想やニュース風な短文も募集しています。いちおう500字、1000字が標準ですが、長短はニューズレター編集部で対応可能です(分載・連載も可能です)。図版使用も可です。

なかなか投稿がないので、新たな企画も思案中です。編集部員、撮影班も募集中です。

以上、会員の皆様へのお詫びと感謝と共に (み)

投稿・情報送付は以下の要領をお願いします。

* Newsletter No. 14 について *

- 1) 字数：・エッセイ 1000字前後 ・News & Information 500字程度
 ・記事投稿宛先 事務局・宮川雅 miyab@hosei.ac.jp
 - 2) 締め切り： 2017年2月末日 (ただし、投稿はいつでも受け付けています)
-
- ・文献情報(資料室・西山智則) tomo77@f3.dion.ne.jp
 - ・邦語文献の英訳情報と3行の内容紹介(国際広報委員・伊藤詔子&タラス・サック
 sitoh@cc.matsuyama-u.ac.jp)。(日本ポー学会誌に収録予定です。)

2016年9月1日発行

事務局 〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

日本ポー学会

法政大学文学部 宮川雅 研究室

代表 巽 孝之

資料室 〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1510

編集人 日本ポー学会 Newsletter 編集部

埼玉学園大学人間学部 西山智則 研究室